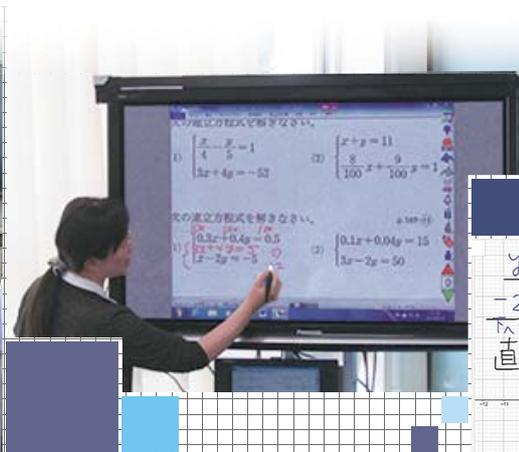


導入事例
てれたっち

生徒には興味と理解を、教師には授業のメリハリを。 IT 活用の教育現場に一石を投じる「てれたっち」。



播磨中は全校生徒約600名。1学年約200名／5クラスで、1クラス35名前後です。学年毎に配置のモニターはなく、特別教室のみで使われています。今回、「てれたっち」を、数学教室に一台設置しました。専用の数学ソフトを使って、普通の黒板では難しい内容をわかりやすく解説し、生徒の数学に対する興味を刺激したようです。実際に使われた感想や、IT機器と教育現場との関わり方についてお話を伺いました。
※先生のご紹介、学校での設置状況などは取材当時のものです。



導入商品

外付け型タッチ化ユニット
「てれたっち」
DA-TOUCH / WB

※ディスプレイは別売りです。

「てれたっち」は取り付けが簡単で、事前準備に時間がかからないのが魅力



「てれたっち」を活用する林先生

「てれたっち」の設置についていかがでしたか？

林先生：私は、播磨中学に赴任する前は小学校の教員でした。その時は、学年に1台プロジェクターもしくは電子黒板があり、教科担任制になっていた6年生はその電子黒板を使っていました。しかし、教室間を移動させるのはたいへんで、短い休み時間での準備に負担を感じていました。「てれたっち」は、このような手間をかけずに、各教室のテレビに簡単にに取り付けて日常的に活用できるのが便利だと思います。

今は、モニター画面が50インチしかありません。小学校の授業に比べ、中学になると黒板に書かなければならない情報量が一気に増えて、もう少し大きなモニターが必要になります。もちろん、普通の黒板と併せて使いますが、「てれたっち」は最大で80インチのモニターまで対応可能なので、買い替えた時にも使えるのが便利だと思います。これは、他の教科の先生も同じ意見です。

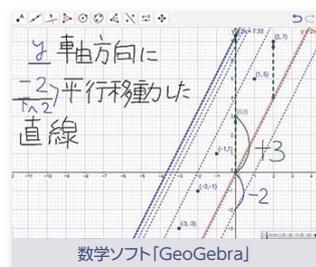
GeoGebra との相性も良く、「てれたっち」の数学授業に興味津々

実際の授業ではどのように活用されていますか？

林先生：分数や小数を含む連立方程式の問題を、整数に直してから解く授業で「てれたっち」を使いました。連立方程式は教科書をスキャンして映し出し、そこにまず私自身が書き込んで、生徒たちに解き方の模範を示します。拡大投影だけならば書画カメラを使ってもできますが、「てれたっち」では、書き込みながらその理論を解説できますので、生徒にとっては理解しやすいと思います。

その後、一次関数の授業では、GeoGebraという幾何、代数、解析を一つに結びつけた動的数学ソフトを使い、グラフの授業を行いました。このソフトは、 $Y=2X$ と書けばグラフを引いてくれるような便利な機能があります。例えば、「グラフの平行移動」と言っても言葉だけではなかなか理解できないものです。取り込んだ画像をてれたっちで表示し、「平行移動」の動きが目視できると、「なるほど、こういうことですか」と納得の声が出ました。

仮に「てれたっち」を使わないで理解させようとするれば、方眼の黒板を使って説明することになりますね。「この線はこの線の平行移動という」と説明するのですが、結果を見ると確かに平行になっていても、移動したという感覚まではなかなか伝わらないでしょう。モニターで動かして見せることで、上に平行なのか、あるいは下にも横にも…ということを理論的に解説できます。GeoGebraは、「てれたっち」と相性も抜群で、やりたいことをパワーポイントで作成するよりもスムーズでした。



数学ソフト「GeoGebra」

どう使うかは教師しだい、使い方の幅が広がる！

新しい展望や今後の活用についていかがですか？

林先生：生徒の側からすれば、「てれたっち」のようなIT機器を使った授業は新鮮で、数学に対する興味関心も高まったように感じました。中学は小学校とは違い、教科ごとに専任の先生が授業を行うので先生によって指導の方法は様々ですが、今までとは違ったスタイルの授業を実践できることは確かだと思います。少しだけ授業にメリハリをつけてみようか、ホームルームで使ってみようかなど、教師が柔軟に考えることも必要だと思います。私は、教室の席替えの時にも「てれたっち」を使ってみました。教科だけでなく、係を決める時や校外学習のしよりの説明など、ホームルームなどでも活用の方が広がりますね。



取材にご協力いただいた先生



播磨中学校
木下 康雄 校長



林 悦子 先生 (数学担当)
数学ソフトを使って工夫した授業を展開。
ホームルームでは変わった使い方も…。

CLIENT DATA

導入学校／播磨町立播磨中学校
所在地／兵庫県加古郡播磨町
開校／1947年

